

文明の退化の音がする



デーブ・スペクター

構成・桐山秀樹
新潮社

Bunmeitaika no Oto ga Suru
by Dave Spector

Hawaii Islands

文

デーブ・スペクター

構成 桐山秀樹



Bumetaika no Oto ga Suru

化

by Dave Spector

明

の

る

音

新

が

潮

す

社



ぶんめいたい か おと
文明退化の音がする

1987年4月20日 発行

1987年7月25日 4刷

著 者 デーブ・スペクター

構 成 桐山秀樹

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京4—808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

定 価 1000円

印刷所 株式会社光邦

製本所 植木製本株式会社

© Dave Spector, Printed in Japan, 1987

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-10-365601-8 C0030

BUNMEITAIKA NO OTO GA SURU ● MOKUJI

オバサン大国ニッポン

男尊女卑の旧弊な社会党に誕生した女性党主。あくびの出るほどつまらない日本の政治が、土井たか子のパワーで変わるのか。

9

ホテル大国ニッポン

超近代的な外観とはうらはらにサービスはお粗末の一語。客たちのマナーや風体も、またしかり。

23

医療大国ニッポン

外人はみんな日本の医師にかかるのを恐がっている。おこれる医療大国の盲点とは？

41

ヘルシー大国ニッポン

男はジョギング女はエアロビクス。健康食品も大氾濫。世界一の長寿国がこの上「健康」にとりつかれたら――。

59

サービス大国ニッポン

就職希望者殺到のサービス業。にもかかわらず、この国のサービスのトンチンカンさは目にあまる!!

73

新聞大国ニッポン

経済大国に君臨する大新聞も世界のマスコミからはつんば棧敷。正義の味方ぶるその仮面をはぐと――。

89

CM大国ニッポン

日本のCMはたしかにスゴイ。コピーライターも芸術家気どり。だけど広告の意味をとり違えているのでは？

107

テレビ大国ニッポン

ヤラセもあれば泣きもある。色もあれば欲もある。何でも揃ったテレビ界。ないのは「恥」と「知性」だけ。

123

むっつりスケベ大国ニッポン

性の解放に国民の八割は反対。片やセックス産業は大盛況。ホンネとタマエを使い分ける日本人の性とは？

139

犯罪者天国ニッポン

「恐るべき働き蜂」という日本人観が「ミウラ」で若干修正された――青い目から見た新人類的殺人容疑者。

153

英語大国ニッポン

英語が大好きで、英語の勉強がお盛んで、しかも英語が下手な日本人。そんなに「国際人」になりたいのか？

171

ガイジン天国ニッポン

テレビでラジオで、青山で六本木で、二流ガイジン大活躍。片やアメリカで今、ニッポン人は？

187

アメリカかぶれ大国ニッポン

「ロン」「ヤス」と呼び合う仲はいいけれど、どの街角もアメリカ一色。薄気味悪いこの世紀末的現象！

201

まえがき

外国の滞在記を書こうと思うなら、その国に着いてからまだ日が浅いうちに書いておけ、とよく言われるが、僕は必ずしもそうは思わない。

初めて日本の土を踏んでから、幾年かの歳月が流れたが、その間にも僕の日本観は二転三転している。例えば、日本人は親切な国民で、サービスは至れりつくせりと聞き、実際に日本に住んでみると初めのうちは全くそのとおりだと思っていた僕だが、時が経つうち、次第にこの国の的外れなサービス過剰ぶりに異和感を感じるようになってきた。

だから本書は、いわゆる「青い眼から見た日本人論」式の印象記ではないつもりだ。旅行者の眼で見ることでできない日本の表情のウラオモテが、僕にもあるていど読みとれるようになっていくからだ。それは決して僕の感性が「日本的」になったということではない。僕はアメリカ人だし、これからはずっとそうだ。

じつさい、日本のマスコミで活躍しているガイジンたちには少しガツカリしている。日本の美点をことさらに言いたててもらって喜んでゐる日本人も問題である。ガイジンのお墨付きなど、そろそろ不要な時代ではないのだろうか。

ガイジンの日本に対する印象など、みな似たり寄ったりだ。それに、ガイジンの立場と言ったって、何もそれがすべての価値標準であるわけがない。ドイツ人が日本を書く、中国人がアメリカを書く……すべて「特殊」な立場から、「特殊」な国のお国柄を云々しているにすぎない。

従って、僕はあくまで一人のアメリカ人の立場から物を言うのであって、それ以上でもなけ

れば以下でもない。だから僕の見方を日本人におしつけようというつもりはないし、何も僕の立場だけが普遍的だと思って書いているのでもない。本書に、アメリカに対する批判がないとおっしゃる読者がいるかも知れない。それは本書の趣旨に反するからあまり触れなかっただけで、僕がそれを書いたらまた別の一冊が出来てしまうだろう。

だけど、本書を手にとる日本人が、「あ、ほめられた」「あ、けなされた」と一喜一憂するさまが、今から想像されて、複雑な心境だ。

新潮45誌上に本書を連載し始めたのがおとしの十一月のことだ。ここ一年半ほどの間にも、日本の状況は少しずつ変わっている。僕が日本のホテルのサービスについて叱言を言ったら、しばらくしてサービスの向上したホテルもいくつかはあった。またテレビのニュース・ショーも、連載当時からすれば少しずつレベルアップしているように思う。

だから、本書に書いたことは、あくまでも雑誌発表の時点のことと御理解いただきたい。

この仕事を終えてみて思うことは、日本人はあまりにもお叱言を言わなさすぎる、ということだ。僕の物言いは、よく「キツすぎる」とか評されるが、それは逆に言えば、日本的な人間関係の中で、他者に対して文句を言うときはよほど気をつけなければならないということのウラ返しだろう。僕がアメリカ人だということで許されている面があつて、同じようなことを日本人が言ったら、それこそそのけもの扱いされかねないのかもしれない。

だけど、僕がホテルに文句を言ったら、それなりの効果があつたという話をいくつも聞いている。本書で僕は、それこそ言いたい放題だったけれど、日本人ももっと言いたいことを言うべきだと思う今日このごろである。

文明退化の音がする

Obasan Taikoku Nippon

オバサン大国ニッポン

日本の政治に関心が持てないワケ

日本の社会、文化、風俗習慣には、外国人として人一倍関心を持つてしていると自負している僕だが、こと政治に関しては全く興味が無い。いや、持てない。

その理由は簡単明瞭、一言でいえばあまりにもつまらないからである。戦後の一時期を除いて、三十数年間自民党がずっと政権を独占し、ドラスチックな変化は一度もなかった。その味けなさといったら、新宿の歌舞伎町あたりで夜遅くまでやっている回転寿司のカウンターに座った時のような白けた気分だ。変り映えのしない板前が握ったスシが皿に乗って、ベルトコンベアで次々と回されてくる。どれを食べても同じような味ばかり、たまたま出てきたナカソネという板前が握ったスシがこれまでとひと味違っていたため、国民が三回目のお替りをしようと思っていたら、店の方でそのメニューはもうオシマイだとかなんとか言い出した。

普通なら、それじゃ他の店へ行こうということになるが、残念ながら、「自民党」という名のこの回転寿司の他には入りたい店がないときているから、なんとも始末が悪い。

三宅坂にある「社会党」という店などは、門構えからして古めかしく、店内はカビがはえてるようで、イキのいいネタなど出てきそうにない。ただ労働組合の関係者には居心地がいいのか、団体で出入りするのをよく見かけることがある。それから「公明党」という寿司屋は、ある宗教関係者しか入れないし、「共産党」という店はメニューがアカガイひとつしかないことで有名だ。「民社党」なんて店も客は組合か中小企業のおジさんばかりで、くすんだネクラなイメージがぬぐえない。ただ少し前まで「新自由クラブ」なんていう小さな小料理屋が店を出していて、一時ちよつと繁

盛しかけたが、最近お客が少なくなつたとかでサッサと店仕舞いしてしまつた。その後ほとんどの店員が回轉寿司の「自民党」に、使つてくれと弟子入りしたという話も聞いた。とにかく一般庶民が楽しくスシでも食べようかという店がほとんどないのだから困る。仕方なく皆が「自民党」屋の回轉寿司で済まそうかという氣になるのも当然だろうと思う。

ところが、最近の新聞やテレビを見ると、お客に見限られた「社会党」屋が美人という評判の女の板前をお店に立たせて人氣回復をはかうとしてゐるとはやし立ててゐるらしい。その女板前は土井たか子という名で、まだうら若き頃に当時の店主がスカウトして手塩にかけて育ててきた「箱入り娘」だという触れ込みだ。

もともと日本の政治について全く興味がない僕は、土井たか子という名をほとんど耳にしたことがなかつた。正直言つてここ二、三週間あまり土井たか子、土井たか子とマスコミが騒ぎたてるので、僕はテレビタレントの土居まさるの娘か何かが政界に立候補したのかと錯覚したぐらいだ。そうこうしてゐるうちに年を聞いて驚いた。なんと五十七歳。これはもう他に形容する言葉がないくらいに立派なおバサンである。

「箱入り娘」といえば、日本では普通二十歳前の女の子を意味する言葉だと思つてゐたが、五十七歳まで箱入りだつたというのだから恐れ入る。そういうたぐい稀なる人が店の奥から突然出てくること自体、「社会党」という店の古めかしさを象徴してゐるとしか思えない。お家の大事を賢い孝行娘がきりもりして見事再興させるといふ話は、日本の昔話などでよく聞く筋書きだが、果してどうなることやら。

寅さんばりの美人女性リーダー

ところで、新聞や雑誌は彼女のことを盛んに「美人政治家」だと持ち上げているようだが、テレビでお顔を拝見する限りではブスではないと思うけれども、マスコミが取りたてて騒ぐほどの美貌の持主とは思えない。特に、テレビの記者会見で彼女の声を聞いて驚いた。野太いというか、はっきり言えばドラ声だ。それがある新聞は「ハスキーな声」と書いていたが、とんでもない。そんなよそこいらの日本人の男性よりはるかにドスのきいた声だった。しかも身長は一六八センチ、体重五九キロの偉丈婦ときている。とても日本的な美人には見えない。

率直な彼女の印象を言わせてもらえば、公立の図書館あたりで働いているベテランの女職員、もしくは小うるさい中学校の体育か音楽の教師といった雰囲気のおバサンに見える。新聞によつては渥美清が女装したのではないかと思うようなオモシロイ顔の写真すらあつた。そういえば僕は以前どこかであいつた感じのおバサンが大勢集まっているのを見たことがあつた。それは、新宿コマ劇場に美空ひばりのショーを見るために押しかけた後援会のおバサン達だった。

日本のマスコミには、女性が事件の主人公になると、安直としか言いようがないほど、「美人」という形容詞をつけたがる悪癖がある。「美人妻が失跡」、「惨殺された美人秘書」、「美人ホステス殺害」……等々、ご当人と共に犠牲者にはお気の毒だが、僕の知る限り、文字通りの美女にお目にかかったためしがない。読者を引きつけるためにいささかオーバーな表現になるのはわからぬでもないが、それにしても「美人」の乱発は目にあまる。

すぐれた政治家であることと、美人であることは何の関係もないはずである。無論、ブスである

よりは多少なりとも美人の方が男性からは票を集めやすいのかもしれないが、あまり美人すぎると逆にブスの女性から嫉妬されて票を失なう可能性もあるので、美人であることの損得はプラスマイナスゼロだろう。マスコットガールならともかく、現実の政治を行なう上で美人であることは何らメリットにはならないのである。それを、美人だというのが唯一の好材料のように騒ぎたてるのは、当初から彼女が実際の政策面では何の役割も果たせず、あくまでも社会党のマスコットガールとして振舞うことだけをマスコミが期待しているからだろう。だがもし本当にマスコットガールを選ぶつもりならば、もうちょつと若くて可愛げのある女性を捜した方がよかつたのではないか。

実はこうした声が世間にあることは土井女史自身も重々ご承知の様子らしい。「女性を党の飾りものにするような声もありますが、私の顔は飾りもの向きではありません」とオノレの分を知った発言をなさっている。にもかかわらず、嫌がる彼女を無理やり委員長に押し上げて悦に入っているらしい社会党のオエラ方達は、五十過ぎのオバサンがまだマスコットガールとして通用すると思っているのだろうか。

また、彼女を起用することで女性層の拡大をとネラっているのならそれは大間違いというものだろう。自分たちと同じタイプの女性が目立つことを何よりの生きがいとしている一部の女性運動家ならともかく、八百屋のオジサン相手に、ダイコン一本を安く買うために金切り声をあげている大多数の主婦たちにとっては、土井たか子さんのように「インテリ臭くて、理屈っぽい」感じのする女性は大嫌いのはずである。何故なら、土井たか子女史のような女性を認めることは、何よりも自分達の存在を否定することになるのだから――。むしろ彼女たち主婦が望んでいるのは（これは社会党にはないが）、自民党の石原慎太郎センセイのように男らしくて、キリリと引きしまった男性議員か、主婦にもわかるように税金問題や銀行の利用法を教えてくれる野末陳平さんのような人

ではないか。現在、人気上昇中の女史ではあるが、僕はもっと長い目で見てゆきたいと思う。

そもそも、党首に女性選ばれたからといって、社会党がフェミニストの政党だなんて考えては筋違いもはなはだしい。新聞で知ったのだが、約八万六千人という社会党員のうち女性は一割しかないそうだ。この数字こそ、これまで社会党がいかに女性を軽視してきたかの証左だろう。現にある社会党の幹部はかつて、「社会党は女性を党首にするほど落ちぶれていない」と語っていたほどである。では今回、土井さんが委員長になったということは、社会党が落ちぶれたという以外の何物でもないではないか。

和製サッチャーかジャンヌダルクか

しかしそれにしても、土井さんに委員長選挙への出馬を要請する時の社会党三役の説得工作というのは、聞いているこちらが顔を赤らめたくなくなるようなものすごさだった。新聞記事を引用するとそれは次のようなものであったらしい。

田辺書記長 土井さんの出馬をお願いしたい。

土井副委員長 委員長を受ける自信がない。

山本副委員長・田辺氏 ヘタに自信がある人の方が困るんだ。

土井氏 そういうことなら私にだって自信はない。そんなに詰め寄られても……。

(中略)

田辺氏 土井さんを求める声が強いのは事実だ。「立候補はしようがない」ということになるんじゃないの。こういう状況になってきたんだから、やむを得ない。地方の意見、つまり党内世論が